

家畜衛生週報

ANIMAL HYGIENE WEEKLY

No.3922 農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課、動物衛生課 2026. 9. 28

・家畜衛生レポート（新潟県）	297
・第66回全国家畜保健衛生業績発表会演題（香川県）	300
・動物用医薬品副作用報告（令和8年8月）	304

☆家畜衛生レポート（新潟県）

新潟県上越家畜保健衛生所

1 新潟県の農業と管内の状況

新潟県の農業産出額は令和6年に3,103億円で全国12位であり、そのうち米が2,069億円と全国1位で県農業の中心的地位を占めています。一方、畜産は米と園芸に次ぐ主要部門で産出額は471億円と全体の約15%を構成し、乳用牛・肉用牛・豚・鶏がバランス良く飼養されています。特に、採卵用ひなの産出額は47億円で全国1位となっており、県内外の採卵鶏農場への安定供給拠点として重要な役割を果たしています。

県内の家畜保健衛生所は4所1支所で構成されていますが、当所は県南西部の上越市、妙高市、糸魚川市を管轄しています。庁舎は上越市内の上越地域振興局分館1階にあり、所長以下、防疫課2名、企画指導課3名の計6名で業務にあたっています。



上越家畜保健衛生所管轄区域

管内の家畜飼養状況についてですが、令和7年で乳用牛11戸213頭、肉用牛17戸584頭、豚1戸27頭、養鶏（100羽以上）4戸415,086羽となっています。日本百名山として知られる妙高山の山麓に位置する笹ヶ峰放牧場では、乳用育成牛や肉用繁殖牛の夏季放牧が関係者の協力のもと積極的に行われています。



上越家畜保健衛生所の外観（1階部分）

2 家畜の飼養戸数及び頭羽数

区分	乳用品		肉用牛		豚		鶏	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	羽数(千)
県内	122	4,650	164	11,500	76	150,600	92	6,924
管内	11	213	17	584	1	27	4	415

令和7年2月1日現在

3 高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）防疫対策について（令和6年度業績発表に追記）

本県における家さんのHPAI発生状況についてですが、近年では令和4年度に5件252万羽、令和6年度2件34万羽、令和7年度2件91万羽に対して防疫措置を実施しました。このうち、管内においても令和4年度に1件10.4万羽、令和6年度に1件188万羽の発生がありました。当所は少人数のため、発生時には他の家畜保健衛生所から家畜防疫員が参集して対応に当たりました。令和4年度の事例では、約200km離れた県北の大規模農場での防疫措置中に発生したことから、職員は派遣先からとんぼ返りでの対応となり、肉体的・精神的に非常に厳しい現場となりました。

農場の再開にあたっては、再発防止対策を経営者と協議し、飼養管理がしやすい約4万羽への規模縮



HPAI 机上訓練

小、老朽化した鶏舎の撤去と整地による埋却地の確保、鶏舎の修繕、飲水ろ過及び自動消毒薬添加装置の設置等の対策を実施しました。これらの取り組みを通じて従業員の衛生管理に対する意識は大きく向上しています。このほか、管内の大臣指定地域内には30万羽規模の採卵鶏農場もあることから、シーズン前から緊張感を持って衛生指導に取り組んでいます。また、発生に備え、地域振興局や関係者との防

疫訓練も毎年実施しており、昨年度は関係機関の役割を再確認する机上訓練を行いました。

4 牛伝染性リンパ腫（EBL）対策について（令和5年度業績発表）

管内では平成30年以降、乳用牛5農場、肉用繁殖牛10農場を対象にELISAまたはPCR法によるEBLの全頭検査を実施しています。それぞれの農場で陽性牛を定期的に把握することで、並び替えや更新順位を決める判断材料とするほか、陽転状況をモニタリングしながら、アブトラップや防虫ネットの設置、殺虫剤散布、凍結初乳の利用など効果的な感染防止対策を検討して実施しています。また、笹ヶ峰放牧場を利用している農場が多いことから、放牧期間中の感染予防と牧場の利用促進を両立させるためにEBL陽性牛と陰性牛の分離放牧を実施しています。陰性牛が放牧中にEBLウイルスに感染しないことと、陽性牛も放牧場を利用できるという2つのメリットがあることから、利用農場からは好評を得ています。

5 牛ウイルス性下痢（BVD）対策について（令和7年度業績発表）

令和7年5月、放牧場の上牧前検査において、管内一酪農場で生産された子牛1頭がBVDウイルス

の持続感染牛（PI牛）と診断されたことから、管内でのPI牛の摘発とまん延防止に向けた対策を進めました。当該農場で直ちに全頭検査を実施したところ、PI牛のF1子牛1頭が摘発されました。さらに、当該農場から子牛を導入した2農場について追跡調査を行ったところ、1農場の導入牛1頭がPI牛と判明しました。これらの情報は関係機関で直ちに共有し、対策を協議して地域における本病のまん延防止体制の強化を図りました。令和7年度の開牧時には全頭にBVDワクチンを接種するとともに、上牧前の要件としてワクチン接種を追加しました。また、管内酪農場では毎年バルク乳を用いたPCR検査を実施していましたが、肉用繁殖牛についても4農場でスクリーニング検査を実施したところ、さらに1頭のPI牛が摘発されました。一連の調査でPI牛が計4頭確認され、BVD対策と検査の重要性について生産者の理解が深まる契機となりました。今後も本病のまん延防止指導を継続してまいります。

6 小学校での山羊等の飼育について

ご覧になったことがある方もおられると思いますが、管内は映画や絵本の「夢は牛のお医者さん」の舞台にほど近いところにあります。その影響もあり、小学校では家畜の飼育が広く行われています。今年度は山羊、羊、乳牛、アルパカ、ポニーが25校



笹ヶ峰放牧場での検査



小学校での山羊飼育



高田城の桜

で飼育され、このうち山羊が最も多く22校で飼育されています。当所では毎年、小学校の先生を対象にした研修会講師を務めており、飼養衛生管理基準遵守の注意点などを伝えています。飼育担当の1年生の生徒達はとても喜んで世話をしており、その姿を見ると関係機関としてできるだけサポートしてあげたい温かな気持ちに包まれます。

7 おわりに

上越地域は、歴史と自然が調和した風土を有し、四季を通じた多様な魅力があるところです。高田城址公園は日本三大夜桜の名所として賑わい、雁木の町並みは雪国の生活文化を今に伝えています。上杉謙信の居城、春日山城跡からは日本海を望む景観が広がります。国内スキー発祥の地「金谷山スキー場」をはじめ、妙高・上越エリアにはパウダースノーを求めて国内外から多くの方が訪れ、国際的な観光地としての発展も期待されています。赤倉温泉、池の平温泉などの温泉も豊富です。また、糸魚川は縄文時代からの翡翠（ヒスイ）産地で世界ジオパーク地域に認定されています。もちろん、食についても、新潟米、日本海の海の幸、数々の酒蔵の日本酒、上越伝統野菜、くびき牛、地元料理スルメの天ぶらスル天など、「総構え」となっております。

足を運んで上越地域の魅力を楽しんでいただければ幸いです。

☆第66回全国家畜保健衛生業績発表会演題（香川県）

管内養鶏農家の飼養衛生管理指導と成果

香川県西部家保

○片山 進亮、森田 えり

1 はじめに

令和2年11月～12月、香川県では高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）が13例発生し、うち12例は西部家保管内での発生でした。延約200名の県外獣医師を派遣いただきましたこと、また、令和4年度以降の発生においても多大なご支援をいただきましたこと、農林水産省動物衛生課、都道府県の皆様に厚くお礼申し上げます。

さて、令和2年度のHPAI発生において、発生農場に係る疫学調査チームの現地調査では、多くの農場で飼養衛生管理の不備が露呈しました。そこで、令和3年度以降、飼養衛生管理指導を強化したのでその概要と成果を報告します。

2 指導の概要

令和3年度に国飼養衛生管理指導等指針の公表を受けたことを受けて、香川県飼養衛生管理指導等計画を策定しました。その中で年1回の養鶏農家を集めた研修会を開催し、その後、各養鶏場に立ち入ることとしました。また、令和6年度は農場を多く抱える企業等に対して、飼養衛生管理者を集めた企業別研修会を開催した後に、各養鶏場に立ち入ることとしました。

【養鶏研修会】

令和3年度より、毎年7～8月に養鶏農家を集めた研修会を開催しています。飼養衛生管理基準全般の話に加え、令和3～5年度は、令和2年度の連続発生の反省から、特に問題となった項目を中心に説明しました。

まず、令和2年度には、埋却地の未確保が原因で防疫措置完了が遅れた農場が4農場ありました。そこで、令和3年度以降、香川県鳥インフルエンザ防疫マニュアルを全面改正し、原則、疑似患畜の死体の処理は埋却とすることとしました。そのため、埋却地の確保を全ての農場に指導しました。

また、令和2年度の発生農場のうち、9農場は車両消毒設備が整備されていない農場でした。そこで、消費・安全対策交付金を活用し、管内の車両消毒設備がない農場を対象に動力噴霧器等の整備を指導しました。さらに、鶏舎出入り口の手指消毒や靴交換など、手当金の減額につながった項目を中心に指導を行いました。

しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、研修会の参加は各企業で2名までとしていたため、各企業の所有する養鶏場の飼養衛生管理者まで研修会の内容が十分に伝わっていない可能性があります。令和5年度の発生農場では、飼養衛生管理者が飼養衛生管理基準を十分に理解していないことが明らかとなり、養鶏研修会だけでは限界があ

ることが分かりました。そこで、令和6年度は複数の養鶏場を所有する企業に対して、企業別研修会を開催することとしました。



(写真1) 養鶏研修会

【企業別研修会】

本県では、飼養羽数が数千羽～数万羽程度と、比較的小さい規模の養鶏場が多く、その多くは企業体に属しています。前述のとおり、令和5年度までの養鶏研修会では、各養鶏場の飼養衛生管理者など、実際の作業者に十分な研修効果が見られない事例がありました。そのため、複数の農場を抱える企業体や、過去にHPAI発生のあった企業体で、飼養衛生管理者を集めた企業別研修会を開催しました。5企業、72名が参加し、管内養鶏場の71%にあたる飼養衛生管理者に指導を行いました。



(写真2) 企業別研修会

【各農場への立入検査】

令和3年度以降、HPAI発生シーズン前に、全農場立入検査を実施し、飼養衛生管理基準の遵守徹底を指導してきました。養鶏研修会後に立入検査を実施することで、重点的に指導する事項が共有され、年を追うごとに飼養衛生管理が向上していました。特に、令和6年度は企業別研修会の開催後に各農場への立入を行うことで、立入時の飼養衛生管理基準の説明が大幅に省略され、不適合となった事項に対

して指導できる時間が増えました。効率的に指導することで、飼養衛生管理者と家畜防疫員との間で、基準を満たしているかどうかのすり合わせが現場で十分に行え、複数の農場で飼養衛生管理基準の認識のずれ（飼養衛生管理者は基準を満たしていると思いい、家畜防疫員は足りないと思う）があることが判明しました。改めて丁寧に指導を行い、こうした認識のずれを修正することができました。



(写真3) 指導前の鶏舎；飼養衛生管理者はネットを張っている（丸）ので飼養衛生管理基準を満たしていると認識しているが、家畜防疫員はネットの下に隙間（四角）があって基準を満たしていないとして指導



(写真4) 指導後の鶏舎；隙間に新たにネットを張っている



(写真5・6) シャワー室

3 指導の成果

令和3年度以降の本県のHPAI発生状況は、令和4年度は短い期間に複数の農場で発生があったものの、遺伝子解析の結果等から、農場間で伝染した連続発生ではなかったと考えられます。また、令和5年度、6年度とも1農場での発生にとどまりました。令和3年度より続けてきた養鶏研修会での指導により、各養鶏場の飼養衛生管理が向上した成果が見られました。手当金の減額も、令和2年度は最大1.5割だったものが令和4年度以降、0.8割～1.4割と減少しました。

また、防疫措置は、埋却地の確保が進んだことから、令和4年度以降、4～6日という短い期間で終わることができ、まん延防止につながりました。

さらに、令和5年度は通報遅れがあったことから、令和6年度の養鶏研修会、企業別研修会で改めて早期通報の徹底を指導したところ、令和6年度の発生では早期通報が守られました。

こうした指導を続けていく中で、家保からの指導がないにもかかわらず、シャワーイン・シャワーアウトの設備を新たに設けるなど、より高いレベルの衛生管理を自主的に高める企業が見られ、地域全体の衛生レベルが向上する好循環が生まれています。

今後も、継続した飼養衛生管理指導で地域の飼養衛生管理の水準を維持してまいります。

おわりに

今回の取組みは、令和5年度のHPAI発生後、「農家の自己点検では全部“○”の場合でも、疫学調査チームが現地調査するとなぜ不遵守として指摘されるのか？」との素朴な質問に端を発し、改めて徹底した指導を行うことにより、飼養衛生管理者との認識のずれが見えるようになり、対策を講じることができました。普段から、こうした疑問にアンテナを張って、業務のさらなる改善につながるよう取り組んでまいりたいと思います。

☆動物用医薬品副作用報告（令和8年8月）

産業動物における動物用医薬品副作用に関する報告
（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の
確保等に関する法律第68条の10）

製品名	マイオスフィア PCV ID
製造販売業者名	イブラ・ジャパン合同会社
動物種	豚
発現動物数／ 投与動物数	4 / 70
性	混在
年齢	26日
投与前の健康状態	良好
以前の使用歴	あり
以前使用時の副作用の有無	なし
投与量	1 ドース
投与方法	皮内注射
投与日	R8.6.22
副作用発現日	R8.6.22
副作用の種類	アナフィラキシー
治療の有無	無処置
転帰	死亡
担当獣医師による 評価	因果関係がある可能性がある。
製造販売業者による 評価	4 頭のうち 3 頭はワクチンを投与して 2 - 3 時間後に口から泡状のものを排泄した状態で死亡して見つかり、ワクチン投与によるアナフィラキシーショックの可能性を否定できない。他の 1 頭は泡状のものの排泄は認められておらず、圧死による可能性も考えられる。 アナフィラキシーショックについては取扱説明書にその可能性は記載されているが、ワクチン接種前の動物の状態の観察、ワクチン接種時の動物の取扱い等について啓蒙していく。

通 信

先日、獣医大学に通う学生 2 名にインターンシップとして 1 週間業務体験をしていただきました。畜水産物の安全性を確保するために、ふだん家畜や水産動物に使用されるえさや医薬品などの管理対策、産業動物分野の獣医師の確保に向けた取組や獣医事に関する業務、薬剤耐性対策、牛トレーサビリティ制度、また動物衛生対策や水際対策等にも触れていただき、短い期間ではありましたが幅広く学んでいただけたものと思います。インターン生の受入れでは、職務内容について理解してもらうために分かりやすい説明に工夫が必要ですので、多くの若手職員にとっても刺激になっています。また、インターン生の関心は仕事内容に限りません。職場の雰囲気、残業、異動、休暇制度、もちろん給与、そして公務員試験対策や国家試験など。多くの職員と話をして有益な情報を聞いたのではないのでしょうか。学生時代の時間は限られていますので、趣味やサークルなどかけがえのない経験を重ねていただいて将来の獣医師像を見極めて就職を選んでいただきたいと思います。その進路先として農水省も含め産業動物に関わる仕事を選んでもらえるように、職員の熱い想いは伝わったものと期待しています。

毎週月曜日発行

家 畜 衛 生 週 報

編集・発行：農林水産省消費・安全局

畜水産安全管理課、動物衛生課

☎03(3502)8111 内線 4581

〒100-8950 東京都千代田区霞が関 1-2-1